

平成 21 年度 第 1 回鑑賞教育指導者研修会〈報告〉

■日 時 平成 21 年 8 月 22 日(土) 午後 4 時～午後 6 時

■会 場 静岡県立美術館 講堂、展示室、ロダン館、写真室、講座室、実技室

■参加者 教員関係 9 2 名 (小・中・特別支援学校・高校教諭、非常勤講師、教員志望学生、) 美術館関係 1 0 名 計 1 0 2 名

■静岡県立美術館〈第 1 回鑑賞教育指導者研修〉の開催にあたって

静岡県立美術館長 宮治 昭

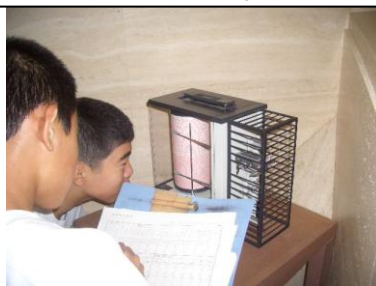
静岡県立美術館は多くの方に美術に親しみ、その楽しさを味わって頂けるよう様々な取り組みを行っています。今回、新たに「鑑賞教育指導者研修会」を行うことにしました。小・中・高等学校の教員を対象に、当美術館を身近に利用して頂くために、当方の具体的な取り組みを紹介し、学校教育のお手伝いが出来ればと考えています。

県立美術館は 17 世紀以降の東西の風景画とロダンの彫刻を収蔵品の核としながらも、日本・西洋の優れた美術品(絵画・彫刻)を幅広く収蔵しており、それらを常設展や企画展に生かしています。ロダン館の常設展と、「狩野派の世界 2009」展(9 月 10 日～10 月 18 日)の企画展はその一環です。それ以外に、様々な特別展を年に何回か開催し(開催中の「クレー 東洋への夢」展はその一つ、8 月 30 日まで)、また静岡ゆかりの作家を取り上げたり、現代美術の展覧会も行って、多様なニーズに応えられるよう、魅力的な展覧会の開催に力を入れています。

こうした展覧会のほかに、子供から大人まで楽しめる様々なメニューの実技教室も開いています。特に子供向けの「粘土教室」「絵の具教室」は人気です。素晴らしい作品のある美術館ならではの实技教室がもてるのも、当美術館の特色の一つです。鑑賞教育と実技教育とが結び合いながら、美術の面白さ、楽しさが実感でき、学校教育をサポートできれば我々としても嬉しいです。



↑出張美術講座の様子



↑中学生の職場体験の様子



↑ロダン館鑑賞プログラムの様子

「美術の見方」は固定したものがあられるわけではありません。何も知らずに見て興味をもつこともあれば、知識を身につけてさらに関心を深めることもできます。作品自体の面白さ、作家に対する関心、あるいは作品が表わす世界や作家の求めた世界、また作品が生まれた時代背景など、優れた作品は見れば見るほど、調べれば調べるほど多くのことを語ってくれます。

美術に限りませんが、何事も関心を持つには「きっかけ」が大切です。若い人たちに美術の面白さを知って頂く「きっかけ」の場として、美術館とわれわれスタッフがそのお役に立てれば嬉しいことです。今回の研修会がそうした「きっかけ」となることを願っています。

■研修(1)学校と美術館の連携について

全国の美術館と学校の連携の進行状況、当館のレプリカや教材キット、出張美術講座の紹介、連携の可能性を広げるための学芸員と先生の役割分担の必要性などを紹介しました。配布資料に『レプリカ、教材キットを使った授業サンプル案』を用意。それらをもとに研修の意義を高めたい旨、説明させていただきました。



□研修後のアンケート（○…有効、満足など ●…改善点, 課題など）

- 美術館と学校が遠距離の場合、特にこのような研修は連携の契機になる。（同様意見3）
- 学校と美術館の連携はかなり確立されてきたので、学校と○○、学校と大学などの仲介役として美術館の役割と連携の意義を広げていってほしい。
- 学校と美術館の共通理解、共通認識のもと、両者の地域に根ざした教育や授業目標が合致していればいい関係、連携になるし、それが子供たちにとって大切なことだと思った。
- 美術館の教育普及活動の充実、身近な(心強い)存在感を感じた。（同様意見1）
- (学校と美術館、先生と学芸員の)心強い関係を築きたい。
- 小、中、高、特別支援の先生方が集まって研修ができ、静岡県の鑑賞教育充実に向けた第一歩が踏み出せた。（同様意見2）
- ホンモノの作品に触れることは大切、だからこそ美術館との連携が重要だと思う。（同様意見5）
- 連携を肌で感じる事ができた好機だった。学校も美術館もオープンな雰囲気なので今後の連携のあり方に期待。
- 美術を身近なものに感じるため、学校在学中に美術館に親しむことは大切なこと。
- (配布資料である)鑑賞授業例が参考になる。
- 近くに美術館があってもなかなか生徒を連れていけない中、授業削減などもあり(腰をすえて)鑑賞教材を扱うのも難しい。何かいい案があれば教えて欲しい。（同様意見2）
- もっと美術館が身近に感じられるように体制を整えた上で、学校と美術館の連携を深めていきたい。
- 連携の重要性は理解していても、実際に行動するためには、このような研修の場が必要。
- どのタイミングで、どう要請し、どう分担するかなど、美術館との連携のあり方を教師側が学ぶ必要がある。
- 美術館にはたくさんいいところがあるので、もっと知ってもらったほうがよい。広報の仕方を考えたほうがよい。

■研修(2)洋画鑑賞について

～パウル・クレー展視察～

《パウル・クレー 東洋への夢》展の作品を視察しながら、洋画または抽象画の鑑賞の手がかりをテーマとして研修していただきました。当館学芸員が、小学生を対象にした内容でフロアレクチャーを実施。作品の比較をしながら解説・対話をし、鑑賞を深めていく体験をしていただきました。



□研修後のアンケート（○・・・有効、満足など ●・・・改善点、課題など）

- パウル・クレーの作品を「線」や「顔」に着目して鑑賞する方法が参考になった。（同様意見11）
- 抽象画の見方、生徒一人ひとりの作品の受け止め方が違うので、すべての意見を受け入れた上で、作者のねらいを伝え、自分の考えと比べさせ、視野を広げていきたいと感じた。
- (作者の略歴や時代背景、作品解説など)理屈抜きに鑑賞することも大切だと知ることができた。
- ホンモノの作品を鑑賞(フロアレクチャー)するのは理想的なこと。
- 「作品を自由にみる」ことを教えることは、将来、美術を愛好する大人になるために大切なこと。
- 語りかけるような口調、声の大きさも、子供の情報吸収や見方に影響があることがわかった。
- ただ漠然と自由に見るのもよいが、目的や点数をしぼって見るのも充実感、満足感がある。（同様意見4）
- 高校生に鑑賞させるなら・・・と考えながら興味深く話を聞くことができた。
- 抽象画の鑑賞方法としてはオーソドックスで新発見はなかった。他の美術館での工夫や研究も視野に入れ、取り入れて欲しい。
- 小学校高学年を対象としたフロアレクチャー形式の研修内容はよかったが、時間が足りなかった。
- 一部の作品しか見られず残念。時間をかけ、多くの作品の感想や意見を参加者から聞きたかった。
- 子供向けの設定で私たち(先生たち)に話されたところに(意見や反応が出にくく苦慮されていたようで)無理があったのではないか。（同様意見2）
- 「顔」というテーマで見るのは、確かに目的をもった見方である。がそれと同時に、発想を限定することにつながってしまうのではないか。

■研修(3)彫刻鑑賞について

～ロダン館彫刻作品視察～

ロダン館彫刻作品の視察をしながら、彫刻作品や人体表現作品の鑑賞の手がかりをテーマとして研修していただきました。当館学芸員のガイドで、彫刻の姿態や表情を真似していただき、表現の誇張や空間、時間をも表現対象にしていることを身をもって体験していただきました。



□研修後のアンケート（○・・・有効、満足など ●・・・改善点、課題など）

- 彫刻と同じポーズをすると、楽しみながらポーズの理由や力の入り具合を考えられることがわかった。（同様意見13）
- 立体だからできる鑑賞の方法であると感じた。（同様意見2）
- ロダン彫刻のガイドを作成(手製)したことがあるが、ポーズをとると詳細の発見が多かった。
- 言葉かけの仕方が参考になった。
- 彫刻作品の鑑賞は授業ではあまりやったことがなかったので、参考にしたい。
- 実際にロダン館に児童を連れて行くのが一番。そこで今日のような鑑賞プログラムをやらせてもらえたら。
- 体を使った鑑賞は、小・中学生には新鮮でわかりやすい方法であると思いました。
- 身体の声というか、身体で感じることも大切なことだと思いました。
- 彫刻をみる楽しさを味わえた。（同様意見1）
- 鑑賞の切り口としてポーズをとることから始め、その後心情や時代背景をみれば、より深く鑑賞できる。
- 形に対して考えさせるのに、説明を聞かせるだけでなく体を使って感じさせるという方法は、大変参考になった。
- 《考える人》が《地獄の門》の上にいるというだけで、《考える人》への見方が変わった。
- これまで生徒を連れて来館し、同様の解説を受けたことがある。次は、《地獄の門》バナーと組み合わせて授業に取り組みたい。
- 学校では、映像や平面的な写真しかないので、同様の鑑賞方法は難しいと思った。（同様意見2）
- 学校では、彫刻作品のレプリカなどを使って展開するとよいと思った。
- 楽しかったので、もう少し時間があるとよかった。
- ロダン彫刻は特徴が多く(わかりやすく)、子供たちに受け入れられやすいと思うので、今回のような動きを取り入れて鑑賞できるよう工夫したい。
- 中学生にポーズをとって・・・というのは、多少難しいとも思った。
- 《考える人》、《カレーの市民》以外の解説も聞きたかった。（同様意見2）
- 写真ではなく、実物を(児童・生徒に)見せたいと常々思っている。美術館利用までが遠い道のり。

■研修(4)日本画鑑賞について
～日本画作品のじか見～

日本画作品の鑑賞または史的情報を提示するタイミングの手がかりをテーマとして研修していただきました。通常、ガラス越しにしかな展示されない屏風を、じかに見ていただき、本物のもつ迫力、質感、素材感を体感する内容でした。どのタイミングで史的情報が必要になるのか、見ることは何か、といった鑑賞の根幹に関わる問題について考えていただきました。



□研修後のアンケート（○・・・有効、満足など ●・・・改善点, 課題など）

- 大接近で、細部まで見れて感動した、迫力があつた、感激した、大変よい経験だった。（同様意見23）
- 屏風に描かれたストーリーを聞くと、さらに興味がわく。（同様意見1）
- 裏や横からみた薄さ、表具の細かさにも驚いた。形状、構造のおもしろさも必見。（同様意見2）
- 知識も必要だがホンモノだからこそ感じられることがあることを体感した。
- にじみや筆さばきなど、作者という存在に近づける気がした。
- 「どこまで事前に生徒に知識を与えるか」という問いかけが印象的だった。個人的には最低限度の情報を与えればよいと思うが、子供の興味をひくためには+α必要かもしれない。
- 作品が身近に感じられた。
- 画材への興味がわいた。
- 桃山時代の作品が、あまりにきれいに残っていたので驚いた。（同様意見1）
- 当時の人は、この屏風をどのような部屋のどのような場所に置いて生活していたのだろうと想像した。
- 難しいが、歴史を学んだ上での鑑賞であればおもしろいと思う。
- 日本の文化や自然美を感じられるものが日本画だと思う。その点で、生活に根付いた装飾的な日本美術では、どうしても「見た目」の鑑賞止まってしまうがち。日本画を「深くみる」とはどういうことなのだろうか。
- 作品保護の観点から、難しいとは思いますが、このような機会を増やして欲しい。
- このじか見の経験を生徒に伝えたいと思う。が、伝わるだろうか。
- 作品の解説について「何」を「どの程度まで」話せばよいか、もっと時間をかけて話し合いたかった。
- 授業で日本画の鑑賞は苦勞している。やはり、同時代西洋の絵画史と比較してやるのがよいと思う。
- もう少しじっくり見て、話を聞きたかった。

■研修(5)教材キット解説

～レプリカ、キット紹介～

美術館側から見ればアウトリーチ、出張授業、遠方の学校との連携の手がかりというテーマですが、先生方にとっては教材としての使い方・利用の仕方を考えていただくことをテーマに研修をしていただきました。当館収蔵品のレプリカや教材キットをご覧いただき、実際に先生方が授業をする立場で触れ、配布資料の授業サンプル案と作品解説を合わせてご覧いただくことで、当館の取り組みを評価していただく機会にもなりました。



□研修後のアンケート（○・・・有効、満足など ●・・・改善点、課題など）

- 出張美術講座のキットに触れて、実際の使い方をわかりやすく説明してもらえて、よかった。（同様意見3）
- このようなレプリカやキットはありがたい。ぜひ使いたい。（同様意見8）
- 特に屏風のレプリカは絵の解説だけでなく、構造の点でも授業に取り入れてみたい。（同様意見1）
- パズルと六種素材別立方体は、特に「いいなあ」と思いました。パズル化すると細部まで目が行くし、実際に触れない作品の素材や重さを体感させるのに六種素材別立方体は役立ちそうでした。（同様意見2）
- 県立美術館が教育現場で使うための教材開発を熱心にさせていることがわかった。
- いろいろ工夫されているものだった。
- パズルを組み立てるとき細部まで見ないと完成しないという話が興味深かった。（同様意見4）
- 屏風レプリカに直接付箋を貼って視覚的に協議する、屏風の後部に隠れてみる、など興味深かった。
- 上質のキットがたくさん作られ、遠方の学校としては利用価値が上がると思う。
- 実寸大レプリカは迫力もあり、使いやすいと思った。
- 教師として自分が持っていたいものばかりだった。
- 学校でも、注意深く見させることから始める鑑賞の授業を行いたいと思った。
- このキットを教師がどう使っていくかを考えることが重要。また「こういう教材があったら・・・」という意見を伝えていけるとよいと思う。
- パズルに、人の顔や動物などインパクトのあるものがあるとわかりやすい。
- ピカソの人物画数点をパズル化して教材にしたことはあるが、このように種類も数も揃ったパズルを使えるにこしたことはない。もっと数や種類を増やして欲しい。
- 県立美術館所蔵以外の作品のキットを作ることは難しいか。（同様意見1）
- さらに多くの作品の実物大レプリカ作成をお願いしたい。
- キットにする作品のジャンルや時代に幅があると使いやすい。

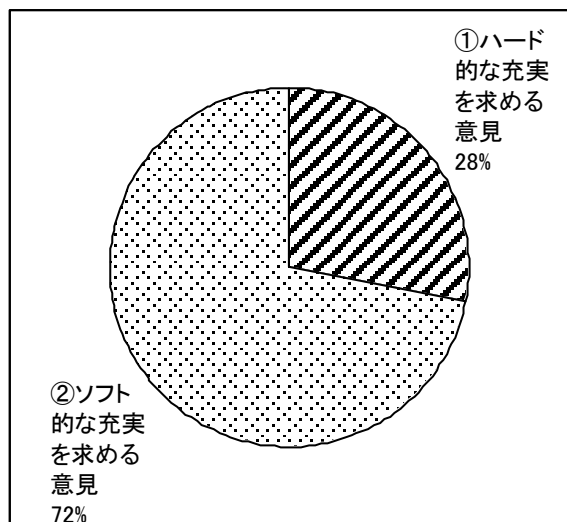
■協議

参加者を8つのグループにわけ、6つの協議テーマをグループごと割り振って、「付箋紙記入⇒整理」という方法で、個々の意見や疑問をグループ内で可視化。その後、一言ずつ意見を発表する協議を、わずか15分でまとめるという挑戦的なタイムスケジュールで行いました。

先生方が授業を振り返り、課題解決を図るための方向性を発見する機会として設定させていただいた協議は、校種や地域をあえてランダムにしたため、校種間、地域間の課題の違いと共通点が見えたのではないかと思います。



□遠距離校の美術館連携で、美術館が留意すること、美術館への要望等



①ハード的な充実を求める意見

学校側・美術館側双方が、行政機関や学校管理職、同僚の先生に対して、学校と美術館との連携あるいは鑑賞教育の重要性を理解してもらおう努力をし、金銭面・システム面の充実を図る必要があるという意見が多かった。

また美術館には、メディアサービスの充実、レプリカ等の運搬補助を期待する声があがり、授業で美術館の情報と教材を活用したい一方で、先生方が勤務時間内に美術館に足を運びにくい現状改善を関係機関に求める要望も多かった。

②ソフト的な充実を求める意見

出張授業への期待・要望が非常に高い。その内容は、「楽しさ第一」「基本的な知識伝達」「レプリカや資料提供」と、先生方のイメージする鑑賞の授業が多様である故に、美術館もそれぞれの先生の授業のねらいや要望に対応する柔軟性が必要となる。

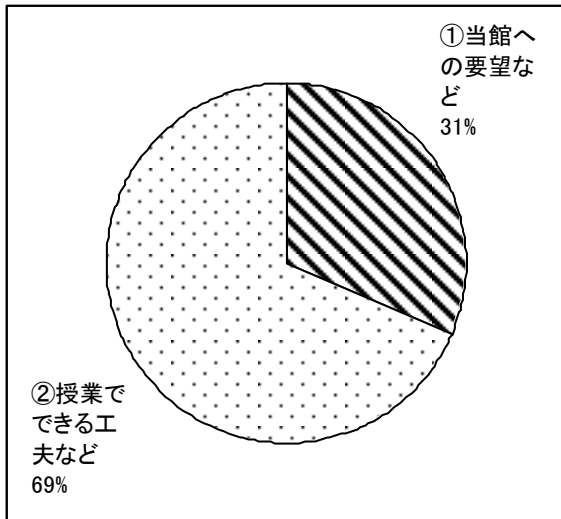
またレプリカや教材キットのレンタル活用を前提にした連携においては、ジャンルや補助資料を増やすなど、さらなる開発への要望が強いことがわかった。移動展の学校開催、県内施設との観覧無料パック化、他館との連携などの提案もあった。

□掛川二の丸美術館、佐野美術館での移動展（当館収蔵品展、日本画多数）の際、子供達が展覧会に行きたくなる授業の工夫について

①当館への要望など

展示の工夫（作品を低めに展示、足場・畳空間の設置、インパクトのある作品を入り口付近に展示等）の他に、墨や岩絵具といった日本画独自の画材を使ったワークショップを企画し、学校で参加を呼びかけるという意見、また入館料を下げ（または無料）学校団体観覧に配慮をしてほしいという要望が出された。当館では、ワークシートを持参し、作品を鑑賞しながら調べ学習をする生徒を頻繁に見るが、そういった試

みが移動展会場内でも見られることを一例として提案させていただいた。

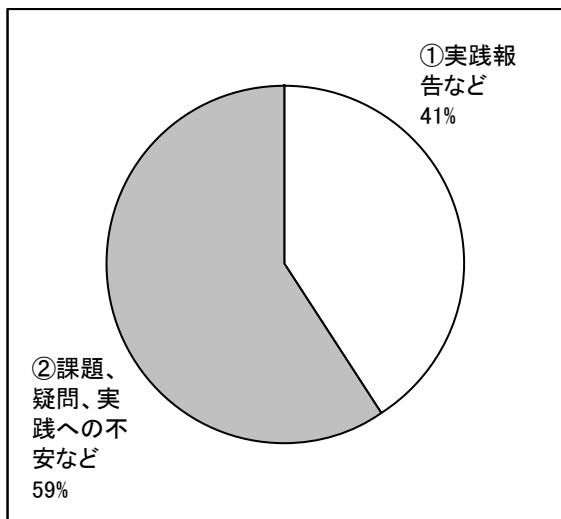


②授業のできる工夫など

出張授業への期待・要望が高いことがわかった。そのテーマは「移動展の魅力」「日本画マメ知識」等であり、同時にそれはレプリカを使って本物が見たいと思えるよう授業を展開して欲しいという要望を含んでいる。さらに、クイズや屏風絵紙芝居の作成など発展可能なキットの要望ともとれる意見があった。

また具体的に《曾我物語図屏風》のレプリカを使い、富士の巻狩りの雄大な場面と現在の地図との照合といった社会科や総合学習への展開を示唆する意見も出された。

□抽象表現作品の鑑賞について、実践例や悩み、取り上げない理由や聞きたいことなど



①実践報告など

鑑賞から表現、表現から鑑賞、という枠組みでの実践事例が多い。用紙の形を工夫して発想につなげようという試み、形や色を積極的に探し出さなければ表現に結びつかない「心情」などをテーマにした時の参考作品として抽象画を鑑賞するという試み、作品にタイトルをつけ、その理由を話して班で共有するなどの実践例が紹介された。

②課題、疑問、実践への不安など

まず、抽象画を鑑賞することで、児童・生徒にどのような力が身につくのかという、授業のねらいに係わる疑問があがった。また抽象

画の鑑賞をする際、どの作家のどの作品を取り上げるのが有効か、技法は解説しやすいが作家の心情や時代背景などは解説しにくい、さらに生徒同士での話し合いは「空中分解」する可能性があって避けている、というような悩みや課題が出された。楽しく作品を鑑賞することも大切だが、それだけでは鑑賞の授業にならないのではないか、また抽象画を見た子供達が疑問に思う箇所が想定できるだけに、先生方はそれに答えられるだけの知識を習得し、自信をもって作品の魅力を提示すべきではないか、というように、抽象画鑑賞の授業に不安をいだいている実態が明らかになった。

□彫刻作品の鑑賞について、実践例や悩み、取り上げない理由や聞きたいことなど

①彫刻作品鑑賞の基本と展望、実践例

重量感、材質感、存在感、空間感といった感性にかかる情報をできるだけ多く感じ取らせるため、「本物に勝る教材はない」のは言うまでもないが、本物がない教室では、できるだけ本物に近づけようと補助教材や資料を工夫しているという実践例が数多く報告された。また写真やスライド、教科書では伝わりにくい彫刻の本質的な鑑賞体験は、学校付近にある屋外彫刻をいろいろな角度から見る機会を設けるなど、教室外の活動に発展させられる可能性をもっている、という意見もあった。

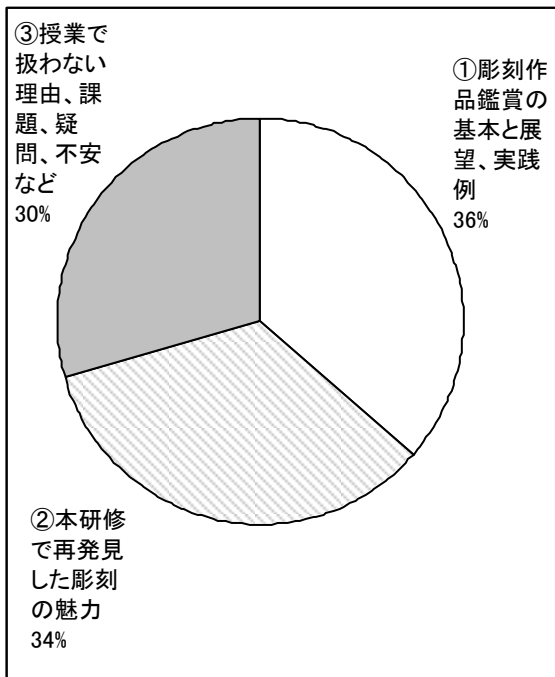
②本研修で再発見した彫刻の魅力

人体彫刻については、姿態や表情を真似して、その心情や意図を探ることが有効で

あるという意見が多かった。またロダン彫刻を鑑賞して、改めて多角度から鑑賞すると感動や発見が多いことがわかったという意見が多くあげられた。

③授業で扱わない理由、課題、疑問、不安など

彫刻作品の魅力を伝えきれない、教材の不足、鑑賞⇒表現への展開が時間と場所、道具の不足から難しい、などの意見が出された。多くは、視覚資料だけでは補いきれない彫刻作品の魅力や鑑賞のおもしろさが（先生方は）わかっているからこそ、中途半端な授業になるのであれば他の平面作品の鑑賞を行った方が無理のない授業ができる、と考えているのではないかと思われる。



□日本画作品の鑑賞について、実践例や悩み、取り上げない理由や聞きたいことなど

①日本画作品鑑賞の可能性、実践例

岩絵具やにかわ、毛筆といった画材に触れる表現から鑑賞につなげる実践、大和絵や木版画、和柄の魅力を発見する実践、さらに北斎漫画や絵巻と現代のアニメーションや漫画文化との、ストーリー性や人物誇張表現といった共通点に気づかせる実践などが紹介された。また日本画と西洋画を比較して違いを感じ取らせる手法も提案された。

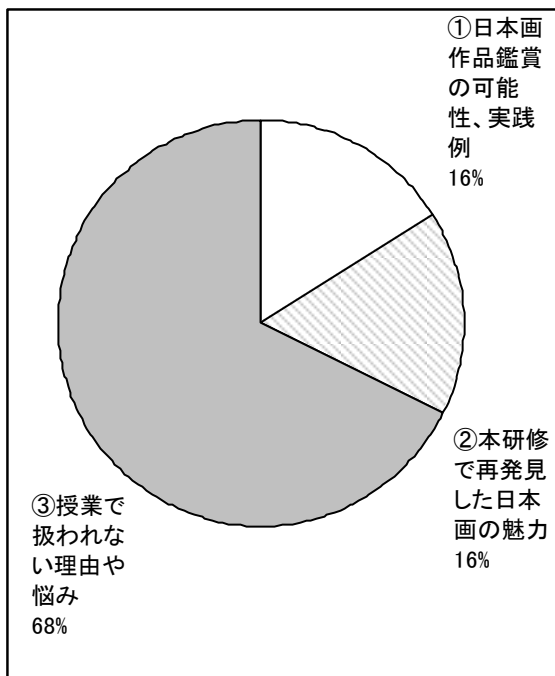
②本研修で再発見した日本画の魅力

じかに見た日本画の迫力、屏風の構造や表具の魅力、生活や自然、人間模様をテーマにした作品の読み解きのおもしろさなどを再発見したという意見が多かった。同時に、児童・生徒に本物の日本画を見せたい気持ちが沸き、美術館に簡単に連れて行けない現実との板ばさみに向き合う先生の姿も垣間見られた。

③授業で扱われない理由や悩み

生活の中で触れる機会の希少さに由縁する児童・生徒の興味の希薄さという環境面の課題、宗教観や歴史観の複雑さとそうした時代

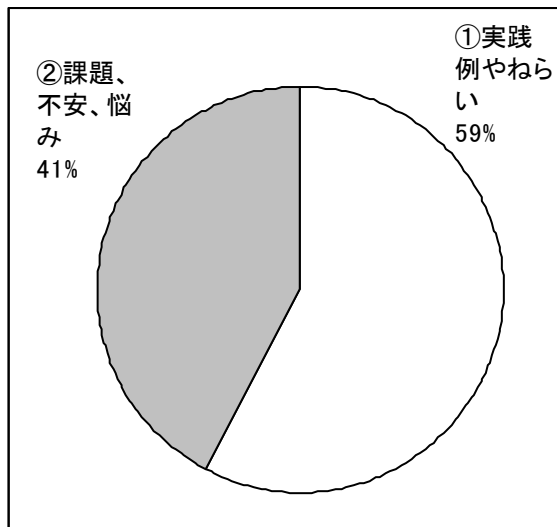
背景を紹介する授業時間の不足、楽しく感じ取らせたい教師の思いに相反して、日本史や漢字が出てきた途端に硬い目に変化する子供達、など教師の思いや工夫だけでは解決できない課題や悩みが露呈した。教師の知識不足という自省もあったが、それこそ美術館が連携・補佐するべき部分ではないかとも思われた。一方で、日本画の鑑賞を授業で展開するときの目標が明確にできない（日本文化の継承や魅力を・・・ということなら、他教科でも可）との意見も出された。



□ 絵画作品の鑑賞について、実践例や悩み、取り上げない理由や聞きたいことなど

① 実践例やねらい

西洋印象派から近代、教科書掲載の著名作家と作品、郷土の作家などをテーマにした実践が、鑑賞の単体授業としても、また表現との組み合わせにおいても、盛んに行われている事例が紹介された。さらに、当館来館による鑑賞を授業の一環として毎年



行っている実践例や他館との展示ディスプレイや展覧会セルフガイド制作による連携の実践例も紹介されるなど、絵画鑑賞に関する取り組みは他ジャンルに比べてかなり進んでいると思われた。授業時の工夫では、毎時間一つの作品を見せて感想を話し合う時間を数分間設けているなど、時間数が限られた中で鑑賞の力を身につけさせようとする試みも報告されており、見方を変えれば、言語能力の育成を視野に入れた取り組みであることを示唆している。

② 課題、不安、悩み

教師側の情報量、児童・生徒の興味も、他のジャンルに比べると充実していることが読み取れる意見が多く出された。授業の評価のあり方やグループワークの進め方、作家や作品の解釈、(特に洋画は)身近に感じるわりに実物を見せる機会の少ない現実など、他ジャンルに比べると鑑賞活動よりも授業構造に係わる課題が出された。また発達段階に合わせた作品選択、鑑賞のポイントなどの悩みを乗り越えようとする先生方の姿が見て取れた。先生方自身の経験や作品鑑賞機会が多いせいか、視聴覚教材と本物との落差(迫力、色、タッチ等)に悩みながら授業を展開しているという率直な意見も聞かれた。

■ 講評 (静岡大学教育学部美術科講師 高橋智子 氏)

高橋先生から「参加された先生方の多さ、研修中の鋭い眼差しから、鑑賞教育への普段の熱心な取り組みが伝わってくる。」というお言葉がありました。今回の研修は、あくまできっかけであり、研修で案内をさせていただいた鑑賞方法、美術館の利用方法、協議での課題の洗い出し、それらを参加者各自が持ち帰って、それぞれの学校や他の研修会で話題にし、実践・検証することで本研修の意義がさらに高まる、という旨の評価をいただきました。

■ 研修を終えて

今回の研修は、それを考える上でのスタート地点を探るためのものと位置づけました。先生方と当館職員とが顔を合わせ、人としてのつながりを持つことで、「目の前の児童・生徒」を見守る先生方と当館職員が同じ地平に立つ試みでもありました。

先生方が、「目の前の児童・生徒」を鑑賞という手段を用いて、どのように成長させていくかを企画し、そこから逆算して授業を組み立てるプロであるならば、当館は、作品という資産を保有・管理し、それらの情報とそれらを鑑賞する最善の環境を提供するプロでありたいと考えております。大切な「目の前の児童・生徒」のための鑑賞教育を進める上で、学校と美術館の連携・・・活用ではなく連携という在り方が指し示す両者の姿は、一体どのようなものなのでしょう。先生方とともに考えていきたいと思っています。